

兒玉大將

撫水作

特71  
567

301178-000-8

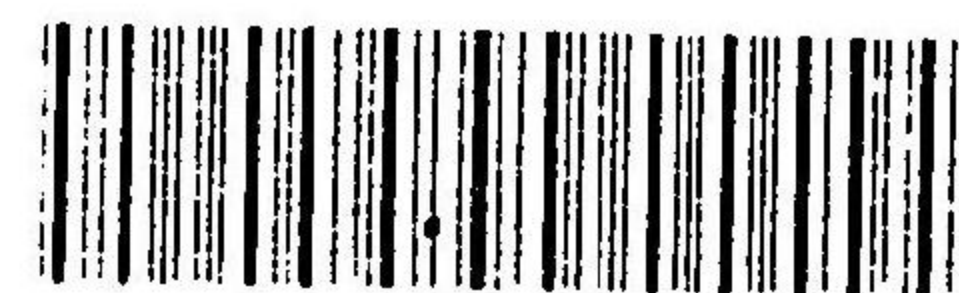
特71-567

兒玉大將

林田撫水/作, 三善和氣/曲

M39.9

CEH-0020





特71  
567



# 序

偉大なる見玉大將は逝きぬ、松は青山  
の原に送られぬ、天に蕭々たる涙の雨  
あり、御賜の愛馬『舞鶴』の胸をたぐけ、人  
類の解すべからざる情緒なからんや。

―林田撫水―

兒

77W13824



# 兒玉大將

は(調二拍子)

三善和氣作曲



3. 3 6. 6 | 7. 7 7. 6 | 7. 6 3. 6 | 7. 0 |  
 リ グ グ ソ コー ダ マ タ イ シ ョ ノ



1. 1 7. 7 | 6. 6 4. 4 | 6. 6 4. 4 | 3. 0 |  
 ヒ ツ ギ ノ アー ト ニ シ ョ セ ヲ ト



3. 3 3. 3 | 3. 3 1. 7 | 3. 6 7. 1 | 7. 0 |  
 オ ソ シ ノ アー イ バ マ イ ツ ル ハ



6. 6 4. 4 | 6. 4 6. 7 | 3. 3 4. 4 | 3. 0 ||  
 ナー ミ ダ ナ ガ ラ ニ ア ヌ ミ ヌ ク

# 兒玉大將

御賜の愛馬『舞鶴』

林田撫水

一、陸軍兒玉大將の

柩のあとに悄然と



御賜おんたまの愛馬あいば「舞鶴まひづる」は

涙なみだながらに歩あゆみ行ゆく

三

かつては日露にちろの戦争せんそうに

聲こゑ勇ゆうしゆー嘶しないて

敵てきの陣地ぢんちへかけりしに

今日けふの姿すがたは何事なにごとぞ

三

首くびうなだれて尾おをたれて

力弱ちからよわくもゆるくと

一足ひとあし何を思おもへるか

二足ふたあし何をなげけるか



四、人ひとばかりかは天てんでさへ

悲かない涙なみだにむせぶもの

けものながらも主ぬし故ゆゑに

人ひとの情なさけはわれも知しる

五、あれが参謀さんぼう總長そうちやうだ

兒玉こたま陸軍りくぐん大將たいしやうだ

指ゆびざされては昨日きのうまで

肩かたはぐひろくかけつたに

六、天てん皇のう陛下へい下の御お命いのち令つけ

名將めいしやうと思おもふて大切たいせつに



お乗のせ申ませし甲斐かひも無なく

何故なにゆゑお死しになされしや

七、 『お、舞鶴まひづるよと』常日つねひ頃ころ

御おんやさしくも兩手りょうてもて

とすりついたわり下くださつた

お顔おほが今いまに忘わすられぬ

八、 勳章くんしょうさげて軍服ふくつけて

たづなをとつて勇ゆうしゆー

こーしてお乗のりなされたる

り、しい姿すがたが忘わすられぬ



九、戦後の日本にどーしても

無くてはならぬ名將と

噂を聞けば聞くにつけ

悲い思のますばかり

一〇、枢のあとにつき給ふ

大將方や秀雄様

姿を見れば見るにつけ

ひとしほ涙がこぼれます

一一、馬ものいはぬと云ふ勿れ

御賜の愛馬「舞鶴」は



此この名將めいしやうを失うしなひて

涙なみだながらに歩あゆみ行ゆく

一、馬うまもの云いはぬと云いふ勿なほれ

御賜おんしの愛馬あいば「舞鶴まひづる」は

力弱ちからよわくも悄然しやうぜんと

柩ひつぎのあとを歩あゆみ行ゆく

(完)





林田撫水作歌

遺族の母 第八版 (定郵)

愛馬 第八版 (價稅)

癡兵 第四版 (一八)

お墓詣 第四版 (冊冊)

勇士の涙 第四版 (金迄)

兒玉大將 愈々發賣 (貳貳)

黒髮塚 愈々發賣 (錢錢)

明治三十九年九月五日印刷  
明治三十九年九月八日發行

定價 金貳錢



著作者 林田撫水

京都市御幸町姉小路北入八番戸

發行兼印刷者 藤井孫兵衛

京都市上京區柳馬場通二條下ル

印刷所 京都印刷株式會社

發兌

京都市御幸町通姉小路北入  
京都市日本橋區橋正町一番地

五車樓

特(電話五百二十一番)



學校及家庭

用言文一致

敘事唱歌

真下飛泉先生作歌

各定價一部金貳錢  
郵錢八冊迄金貳錢

於全國市各書店  
發賣致居候也

第六篇	第五篇	第四篇	第三篇	第二篇	第一篇
凱旋	看負	戰傷	露夜	出征	出征
第八版	第一版	第十版	第七版	第五版	第十三版

第十三篇	第十一篇	第十篇	第九篇	第八篇	第七篇
村長	宵業	勳章	慰問	墓前	夕飯
第二版	第二版	第三版	第三版	第五版	第四版